かるむし

61
麻生区文化協会会報

おっこし山からの眺望
―昔は山ゆりの原生地―

おっこし山は現在の柿生中学校の裏山に位置しており、お椀を伏せたような丸山で、この頂上からは東西南北が眺望できます。遠方には丹沢連峰、天気のよい朝は富士山を望むことが出来ます。（平成六年鈴木三男氏より市に移管されておっこし山となる）

このおっこし山を下り麻生台団地までの一本道、馬の背の山道東側は木々の合間からグリーンタウン、遠方は新宿までも見渡せ、西側は小田急線岡上地区が眺められます。

春は新緑、秋は紅葉を楽しむことが出来ます。昔は山ゆりを沢山見ることが出来た場所で、白く大きな花は優雅に咲き誇っていました。最近ではすっかり見ることが出来なくなり残念です。

雑木林を進み、右に入ると浄慶寺（あじさい寺で有名）、隣の秋葉神社に咲く山桜はみごとで、隠れた名所として楽しめます。しばらく歩くと（旧小倉邸）竹林の静寂は心が癒やされ落ち着きます。この林道は中学生の通学路に、また麻生台団地の人たちが柿生駅に向かう近道として利用されています。

おっこし山の呼び名の由来　（鈴木卓の書より）

懐かしい思い出の多い小道ですが登りつめると峰に出る。ここからは富士、丹沢、大山の連峰が一望に眺めることが出来た。頂上の十字路を右に行けば、丸山の稲荷様から浄慶寺の山、小倉さんの山、そして今は麻生団地になっている亀甲の原（かめっぱら）に出る。そうそう途中の「おばけ谷」も忘れてはならない。私達は「おばけが出た」と言ったこの山をかっ越して来た私たちの先祖、そしておっこしという家号が生まれた

絵と文　佐藤英行

からむし六十一号のラインナップをご紹介します

P1　麻生区の風物紹介　今号は麻生区美術家協会会長の佐藤英行さんの「おっこし山」です。
P2　川崎市文化財団顧問の北条秀衛さんに「風はローカルからグローバルへ」を寄稿していただきました。
P3　役員会と行政・文化財団との懇談会が開催され、これからの文化協会に対してたくさんの貴重なコメントを頂きました。
P4　あさお芸術のまちコンサートについて、この事業を推進して来られた丸山博子さんに寄稿していただきました。
P5　舞台芸能部吟舞吟詠の正岡皎岳さんに詩吟との出会いについて書いていただきました。
麻生アーカイブは、劇作家のふじたあさやさんによる「劇団わが町」の今日までの歩みです。
P6　夏休み親子教室の報告
「昭和音大 楽器の知識」
「世界でたったひとつのうちわを作ろう」
P7　文化祭のレポート、俳句大会と美術工芸展を紹介します。
P8　会員の活動のページ
絵画作品で地域に貢献しておられる志村幸男さん、および、サロンドシャンソン二十五周年記念コンサートを開かれる佐藤百合子さんが登場します。

「風はローカルからグローバルへ」

顧問　北條秀衛

インターネットで「音楽のまち」を検索すると「音楽のまち・かわさき・川崎市」が画面の一番最初に出てくる。本当だろうかと疑いながらスマートフォンのグーグルで「音楽のまち」と打ってみると、やはり「音楽のまち・かわさき・川崎市」が一番上にあるではないか。ネット上ではあるが川崎市は紛れもなく日本一の「音楽のまち」なのである。いつからこのようになったかは定かではないが、少なくとも二〇〇四年（平成十六年）にミューザ川崎シンフォニーホールが開館してからのことである。大工場と飲食街であった川崎駅西口にミューザ川崎シンフォニーホール、その向かい側に大型ショッピングセンター「ラゾーナ川崎」の建設・オープンは川崎市の歴史の中でも大変劇的な変化であり、「川崎のイメージが変わった」と評価され、市内外から数多くの人々が訪れるようになった。

「川崎にクラシック音楽が定着するのか」「閑古鳥が鳴いたらどうしよう」「建設に反対だ、今からでも中止できないか」様々な声が寄せられる中で、当時の市長は建設促進を決定した。決断の理由も様々あったと思われるが、「ミューザを日本一、いや世界に冠たるホールに育てる」「川崎を音楽のまちにする」が二大方針として打ち出され、それ以降市長を先頭に全市挙げて「音楽のまちづくり」に邁進することになる。

この時川崎市が音楽のまちになれる可能性の根拠となったのは川崎市には二つの音楽大学がある（その一つが麻生区にある昭和音楽大学）、各区に市民交響楽団がある（その一つが麻生フィル）、百を超える市民合唱団がある（麻生区にも幾つもの合唱団がある）であったが、確たるものでなくその将来性に賭けたのである。風はまさに逆風であった。しかし、強い信念とリーダーシップ、チームの団結があれば風を追い風に変え、変革は成し遂げられるのである。半信半疑で「音楽のまちづくり」に携わった者の一人として実感している。

この麻生区でも、私が教えを受けた三人の先達がそれぞれ「風」を追い求めていた。麻生区文化協会の前身である多摩区文化協会を立ち上げたのは、藤田親昌先生であった。その当時は昭和二十八年に創立された「川崎市文化協会」があるのみで、その風は川崎の北部にはあまり吹いて来なかった。地元で市民が文化活動をする、まして川崎の北部には多くの文化人が住み着いており、昔からの文化の伝統も引き継がれている。他の四区に先駆けて「文化の風」を川崎の中心部に向けて吹かせたのである。これが各区に文化協会ができるきっかけであった。そしてその風は旧来の文化活動とは一味も二味も違うものであった。古い稲田公民館で就職したばかりの新人であった私は、お茶の当番をしながら、いろいろ教わったものである。

「百葉箱」で温度や湿度を観測しながら雨や風の観測にも余念がなかったのは、星の専門家で短歌をこよなく愛した箕輪敏行先生であった。風を詠んだ歌も数多い。先生から野菜の種をよく戴いたが、ご自宅にも何回となく梅や柿をもぎりに伺った。先生は古くから住んでいる地元住民と新しく住み着いた新住民の間に吹く風（すきま風とでも言おうか）を常に何とかしたいとお考えになられていた。星を眺めながら、この大宇宙と承久の時間の中で、共に時代を過ごすのはほんの一瞬なのだから、皆仲良くすればいいと、きっと思われていたに違いない。

自らの病魔と闘いながら、最後まで私を教え導いてくれたのは杉本長治先生であった。私が市役所に入所した当初からのお付き合いで、この間、稲田風土記の編纂、総合文化団体連絡会（総文連）、市民劇、学校関係者の集いとほとんど途切れたことはない。約四十年になる。いつも優しく包んでいただいた。先生は争い事があるといつも調停役であった。上手に風を受け流しながら物事を決めていく、風を調和させる名人だった。自ら無用な風を起こすことも決してなかった。

今、麻生区文化協会にはどんな風が吹いているのだろうか。順風か、はたまた逆風か、あるいは冷たい北風か、いやいやそよ風かも知れない。外部からでは風は見えない。風はやはり感じるものなのである。

現在、日本の文化活動は二〇二〇年オリンピック・パラリンピックへむけて文化プログラムとして、ロンドンオリンピックと同規模の二十万件が目標となっている。いまだかってないほどの追い風である。グローバルに吹くこの風を地域としてどうとらえるべきだろうか。風任せというわけにはいかない。日本で四年間に二十万回の文化イベントとなると、川崎市の人口規模は日本全体の百分の一なので、二千回分を分担しないとこの目標は達成できないのである。川崎市で年五〇〇回を四年続けるには、この麻生区で七分の一の年約七十回を行わなければならない。麻生区文化協会がすべてを担うことにはならないが、すべてを担うぐらいの気構えが必要ではないだろうか。文化の新しい風を巻き起こし、先達が吹かせたように川崎市全体に風を吹かせ、その風が国内はもとより国際的にもインターネットに乗り旋風を巻き起こす。世界といえども元はそれぞれの地域から成り立っているのである。「ローカルからグローバル」へ。時代が求めている「麻生区文化協会の新しい風」である。

行政・文化財団関係者との懇談会

麻生区文化協会は、行政（麻生区役所、麻生市民館）、川崎市文化財団（アートセンター、新百合二十一ホール等）と手を携えながら活動を進めております。これらの関係者からさまざまなご意見を伺うことは、今後の活動を進めるために重要であると考え、昨年に引き続き、今年も懇談会を開催しました。

八月二十五日（木）の夕方、行政からは、北沢仁美区長、向坂光浩副区長、三枝正孝市民館長、文化財団からは、北条秀衛顧問、多田昭彦理事長、池田健児アートセンター館長にお集まり頂き、本会から、専門委員（笠原恒子、梶亨、加宮節子）、役員、監事が参加して懇談を行いました。この席でいただいたコメントを紹介します。

北条　麻生区は川崎市で二番目の高齢化社会、ずっと住み続けたい人が多い。文化継承のために、文化協会の行事に十五才くらいまでの子どもを高齢者が連れて来れるような文化協会が望ましいですね。取つきやすく、入りやすい間口の広い文化協会。外に出た子どもが戻ってきたくなるような文化協会。東京オリンピック・パラリンピックの文化活動に文化協会はどう貢献するか。「夢がある文化協会に！」

北沢　文化は、暮らしの中にあります。生活の中のお茶、お花…など子どもたちに伝えたいものです。文化協会は、趣味のサークルではありませんが、文化芸術のレベルが高くて入りにくいというのではよくないのではないでしょうか。高齢者だけでなくどんな人でも入っていける文化協会、生涯学習のきっかけになるように、学校の生徒にも入ってもらえる文化協会を目指してはいかがでしょうか。

向坂　キーはおじいちゃんにあると思います。私の経験では、孫はおじいちゃんになつきます。おじいちゃんが、孫に文化を伝えれば文化が継承されていくのではないでしょうか。

池田　アートセンターの夏祭りには驚くほど多数の子どもが参加してくれました。祭では、ヨーヨーが人気でした。お父さんの参加が目立ちました。若い世代のパパ・ママを大事にしたいものです。

梶　サラリーマン社会から開放された六十代は山に行ったりして活動していて、文化協会に入ってもらうのは難しい。七十代に入ってから文化協会に入るのだと、文化協会はどんどん老化します。一方、観光協会は五十代の人もたくさん参加しています。学ぶところがありますね。

三枝　市民活動としての文化協会。誰でも自由に参加できる雰囲気がほしいですね。お年寄りも、気軽に参加できて孫に自慢できる趣味を持てる場としての文化協会を望みます。

多田　川崎各区の文化協会を見ると、文化協会の歴史と街の発展の歴史がぴったりと合います。麻生区は多摩区から分区した新しい区なので、街づくりに関心をもって活動していますね。他区の文化協会は「文化の守り」の姿勢に見えます。麻生区は、革新をしながら街づくりの最善のパートナーになっているというのが実感です。区の行事には区民まつり、福祉まつり、消防祭、子育てフェスタがあります。福祉まつりは麻生が群を抜いています。文化財団は子育てフェスタに協力していくつもりです。

加宮　世間一般に、どこも世代交代がうまくいっていないですね。麻生区の区民は、「神奈川都民」が多いですね。自分もそうだったのですが、定年になってから、ここに骨を埋める覚悟で子ども茶の湯を始めました。娘に引き継ごうとしていますが、「お母さんのようなことはとても出来ない」と言っています。一概によい案があるわけではありませんので、少しずつやっていくしかないのではないでしょうか。俳句は郷土の文化として定着してほしいものです。子どもたちに俳句の魅力を伝えるために、細山に昔あったような「寺子屋」活動を復活してはどうでしょうか。

笠原　俳句だけでなく、川柳にも関心を持って欲しいですね。アマの人でも入りやすい雰囲気が必要ではないかと思います。

菅原　文化協会では「あたらしい風と創造」をキャッチフレーズとして掲げ活動しております。本日いただきましたさまざまなアドバイスを今後の活動に活かしていく所存です。本日は、お集まり頂きありがとうございました。

（記録　佐藤勝昭）

地域課題対応事業「あさお芸術のまちコンサート」のあゆみ

あさお芸術のまちコンサート推進委員会 委員長　丸山 博子

「あさお芸術のまちコンサート」は、誰もが気軽に音楽を楽しめるように平成十一年に企画を提言し、平成十二年度から始まりました。三名の区民が中心となって「あさおランチタイムコンサート実行委員会」を発足させ、区役所と協働で音楽を通じて麻生区のイメージアップを推進することになりました。会場を区役所ロビーに、名称を「音楽は繋がりの糸～あさおランチタイムコンサート」とし、区民の皆様と区内在住や麻生区にゆかりのある音楽家の方々がお昼のひとときに「音楽を楽しむ」というコンセプトで始めました。麻生区には、多くの音楽家や音楽家を目指す若者が在住しています。多様なジャンルの音楽によって心の安らぎや潤いのある生活を求めている音楽愛好家の方々も非常に多いです。そこで、ご来場の方もコンサートに参加していただけるよう、出演する音楽家と一緒になって歌う歌唱曲をプログラムに入れることにしました。

また、幅広い音楽のジャンルを区民と楽しむために、平成十三年度から出演者の公募を行うことにしました。

当初は八十名ほどの来場者数でしたが、回を重ねるうちに二百名を超えるようになりました。

第1回
あさおランチタイムコンサート

第50回
あさおランチタイムコンサート

更に多くの方や次世代を担う子どもたちが身近に音楽に親しめるように平成二十一年度から区役所を飛び出し、演奏会場を区内のホールや施設などに移しました。名称を「あさお芸術のまちコンサート」に改め、目的を「人と人、地域と地域を音楽で繋ぐしんゆり・芸術のまちづくりの推進」、「音楽を通して豊かな潤いに満ちた活気ある生活の推進」、「多様なジャンルの音楽を気軽に楽しみながら世代を越えた人々との交流」としました。また、東日本大震災をはじめ、日本各地で起きる震災や災害で被災された方々の痛みを「忘れてはならない、風化させてはいけない」という思いを込め、副題に「忘れない～明日に向かって　Since 3・11」を掲げてコンサートを行っています。

新春コンサート

ユリホールコンサート

近年では、麻生区文化協会、NPO法人しんゆり・芸術のまちづくり、川崎市アートセンター、昭和音楽大学、麻生市民交流館やまゆり、川崎新都心街づくり財団などの文化芸術を推進している麻生区の団体や大学と連携を取り合いながら、多くの皆様のご協力とご支援をいただいています。現在は、年間七回のコンサートを主催し、総計二千二百名を超える方にご来場いただける事業となりました。

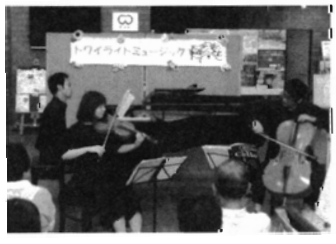
年間のコンサートスケジュール
（平成二十八年度現在）

- ◉シネマ・サロンコンサート（二回）
- ◉区内ホールコンサート（二回）
- ◉ユリホールコンサート
- ◉ユニヴァーサルコンサート
- ◉新春コンサート

川崎市アートセンター
シネマサロン
コンサート

区内ホールコンサート
〈しんゆりマルシェ2015参加〉
エルミロード1Fに於いて

あさお芸術のまちコンサート推進委員会では音楽家や音楽愛好家の交流を深めるため、音楽家のネットワーク登録も行っています。このネットワーク登録制度を生かし、区役所ではトワイライトミュージックが不定期で開催されています



トワイライトミュージック

あさお芸術のまちコンサート推進委員会は委員が忌憚のない意見やアイディアを出し合い、議論を重ねています。

これからも委員、出演者、ボランティアスタッフが一丸となり、皆様に親しまれるコンサートを開催していきたいと思っております。

あさお芸術のまちコンサート
推進委員会　委員

詩吟との出会い

正岡皎岳

まだ東京に転勤する前に大阪のとある住宅団地に住んでいた頃、通勤のバスの中で声を掛けられて市役所の詩吟同好会の世話役をしている方に詩吟を勧められ、その方の指導で毎週日曜日にその団地の集会所で練習を続けておりました。

ところが突然の転勤命令で東京支店勤務となり、仕事の関係もあり詩吟とは縁遠い身となっていました。ところが平成四年の正月のことです。飲み仲間と近くのスナックで飲んでいると、後に吾が師匠となる先生が入ってきました。酔いも手伝って気軽に声を掛けたら詩吟の会員と言われたので私も昔、詩吟をかじったことがあると言ったら、その場で詩吟を一吟をと言われ、覚えていた詩を吟じたら筋がいいと言われ、その会の新年会が翌日にあるので是非参加してほしいと言われ、その新年会に参加し会員の皆様に紹介され即日入会しました。

その会とは今の公益社団法人日本詩吟学院という日本で最大の歴史ある詩吟の認可団体で、多摩区・麻生区・川崎市・横浜市他に在住の会員からなる聖吟会という会の芳洲支部だったのです。

その支部長だった先生が聖吟会の会長になり多忙となったので、麻生区文化協会の舞台芸能部の詩吟の委員を引き継いで欲しいと言われて引き受ける事にしました。

暫く委員を続けているうちに詩吟関係の取りまとめ役を仰せつかり今日に至っております。

現在は(公社)日本詩吟学院岳窓会、(公社)日本詩吟学院聖吟会、(公社)日本詩吟学院嶺風会、(公社)日本吟道学院緑神会、紫水流吟詠会多摩紫峰会の五団体で毎年一致協力して和やかに文化祭を盛り上げております。

これからも会員の増強や、会員のみならず一般市民の皆様に関心を持っていただけるような新企画等でもっと活動して参りたいと思っております。

麻生アーカイブス②〈劇団わが町〉をわが町の劇団に

劇作家・演出家　ふじた あさや

新百合ケ丘にアートセンターを建設しようという話し合いの中で、ここを市民の文化活動の拠点にしたいという声が上がった。建設五年目になってようやくそれが実現したのである。それが市民劇団の構想で、アートセンターはそれを発信事業の一つとして位置付けてくれた。

二〇一二年に行われた最初の募集で、私はこういう呼びかけをした。

〈『わが町』をやるから劇団わが町？いいえ、わが町のための劇団だから劇団わが町！プロアマ問わず高齢者も歓迎します。私と芝居づくりしませんか？〉

『わが町』というのは、一九三八年にアメリカのソーントン・ワイルダーの書いたドラマで、アメリカのある田舎町の日常が淡々と紹介されるだけの脚本だが、見ているうちに日常のかけがえのなさが伝わり、人間に対する愛おしさがこみあげてくるという傑作で、世界の各地でその土地の出来事に翻案され、日本でも一九六四年に長岡輝子さんが『わが町・溝の口』と題して多摩芸術学園の卒業公演用に翻案した。それを新百合ケ丘のことに置き換え、さらに原作と場面を対照しながらすすめるという構成で、第一回公演を企画した。

その呼びかけの結果、集まった参加者は、四歳から七十四歳まで六十名。その六十名から出発して、最初の試演『わが町しんゆり』にこぎつけたのが、二〇一三年三月だった。さらにバージョンアップを図って、六月には最初の本公演に持ち込み、翌十四年十一月、麻生区文化協会三十周年記念公演として麻生市民館で上演し、十五年一月には多摩市民館へも巡回した。さらに四年目には長岡脚本の『わが町・溝の口』の復元上演に取り組むことになる。

その間を縫って十四年三月には、二本目の作品『夢みる人』に取り組んだ。これは川崎の生んだ知の巨人ともいうべき岡本太郎氏をモデルに、集団創作で脚本作りをした作品で、クレジットにはじめて〈劇団わが町文芸部〉が登場した。

〈劇団わが町文芸部〉はさらに翌年の公演『ザ・チェーホフ』で発展し、現在取り組んでいる新作公演でさらに飛躍している。『ザ・チェーホフ』はチェーホフの短編の脚本だが、新作はゼロからのオリジナルである。それなのに二十人ものにわか劇作家が名乗りを上げている。中には小学生や中学生までいる。こんな劇団はどこにもない。

出発当時、四歳の子供を参加させてどうなる、と危惧する向きもあったが、杞憂だった。

一番目覚ましい成果を上げたのは子どもたちの方だった。セリフ覚えは抜群だし、身体能力も即興力もある。追い込まれるのは大人の方だった。子どもが元気なので大人が頑張れる…そんなユニークな劇団に〈劇団わが町〉は成長しつつある。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

からむし五十九号で「麻生アーカイブス①」を掲載しましたが、今回六十一号で「麻生アーカイブス②」を劇団わが町の芸術監督もされているふじたあさや先生に執筆していただきました。

〈広報委員会〉

夏休み親子教室

実行委員長　橋本　周

「芸術・文化のまち麻生」らしい夏休み親子教室十七講座を今年も開催することができた。

親と子が共感し合った夏

日本の伝統文化を伝える表現活動や創造力を働かせたものづくり。なぜ、どうしてと不思議さに驚いた科学。そしてここちよい音楽にふれたり、自然や生き物に出会い好奇心一杯の新しい発見など。直接体験をした子どもたちが目を輝かせ楽しむ姿は素晴らしいものであった。

特に土・日開催の教室には保護者の参加も多くみられ、共に学び合い共感し合っている様子に感動的であった。

保護者の方からの声

○子どもと同じ物が作れて良かった。
○息子と参加、和室で作法などを学べて良かった。
○先生方の教え方が分かりやすくて素晴らしい。
○日本の歌など子どもにもっと伝えていきたい。
○川遊びなど親子で楽しめて良かった。
○日頃もっと子どもと関わろうと思う。

最後に、大学や地域の方、そして講師、サポーターの皆さんのご協力により、実り多い教室が開催できたことに感謝したい。

「楽器の知識を学び　楽しい演奏会～木管五重奏～」

サポーター　横須賀 朝子

昭和音楽大学の協力で、会場は昭和音大南校舎のスタジオを使用し、音大を卒業してプロとして活躍なさっている奏者五人が、クラシックの曲だけでなく、アニメの音楽なども演奏し、小学生用にとてもわかりやすい曲目解説をしてくださいました。木管楽器は「笛」系なわけですが、木管といいながら全部金属でつくられているように見える楽器があるのはなぜか?とか、それぞれ楽器によって息の吹き込み方の違いがあるなど、とても楽しい解説でした。そして最後には希望者全員に楽器体験をさせてくださいました。笛の息を吹き込むところはリードと言って、奏者は使うたびに小刀で削って使うとてもデリケートなものもあるのですが、わざわざ小学生用にリードを用意してくださるなど、昭和音大の方々のご協力に感謝いたします。

「世界に一つだけのうちわ作り」

講師　小田島 寛・紀美

昨年までは和紙にマーブリングやたたみ染めの技法で模様をつくってから竹骨に貼り、うちわを作ってきた。

偶然の模様ができるのでわくわく感やドキドキ感があったが、毎年参加してくれるリピーターのためにも今年は少し新しいことに挑戦してみようということで、ステンシル技法を取り入れてみた。

ステンシル技法（孔版・切りぬき）は、きり絵の中に色を入れて版画にするものだが、いくつかの課題があった。

講師の説明を真剣に聞く子ども達

一つはステンシルに合うデザインや絵を考えなくてはならないことだった。ゼロから考え出すのはかなりハードルが高いだろうと予想された。

そこで、かんたんな図柄を何種類も用意してみた。

二つ目はカッターを使うことだった。三年生の図工で初めてカッターを使うので心配はなかったものの、細かい切り抜き作業のためカッターの使い方もおさらいする必要があった。

三つ目は時間だった。子どもにとっても初めての技法であるので時間の配分にはかなり工夫が必要であった。

さて、いよいよ本番である。参加者は、保護者も含めて二十一人、サポーターは、文化協会四人の方々でした。

黒板に作り方や参考作品を掲示した。まず、黒板の周りに集合してもらい手順の説明を聞いてから、各自がうちわ作りにとりかかった。

なかなかデザインや絵柄が決まらない子ども達に、アドバイスしながら用意した図柄を渡してみたり、参考作品を見せたりした。

中にはスマホを使って、子どもに写真を見せ、図柄を決めている親が複数いた。若い親達なりの工夫には感心した。

カッターによるけが人もなく、子ども達は細かい作業に集中した。

図柄の下に色和紙を敷き、切り抜いた部分に絵具を付けたスポンジで着色した。絵具が乾くのに時間がかかるので、ヘアードライヤーで乾かした。うちわにしていくためには周囲に沿って縁取りテープを巻かなければならない。時間が迫っていたのでここでもサポーターの方々の力を借りた。

こうして新しい技法によるうちわができ上がった。これまでの偶然の模様の面白さも捨てがたいが、子ども達の作品一つ一つにオリジナリティーが溢れていて、色とデザインがポイントの、まさに「世界で一つだけのうちわ」であった。

しかし、課題も見えてきた。デザインや絵柄を決めるのに、もう少し手立てが必要だろう。

色の配分や組み合わせに気を付けて、すてきな模様をつくっている。

カッターを安全に使い曲線や細かい部分も熱心に取り組んだ。

がんばって作ったうちわを手に記念写真。
夏休みの自由研究にするという子ども達もいた。

第二十八回 麻生区文化協会俳句大会（十月二十三日）

実行委員長　本玉 秀夫

「一般の部」

～入選句～

川崎市長賞
千枚を二撫でしたる青田風　岸本 洋子

川崎市議会議長賞
啓蟄や動かぬものに力石　本玉 秀夫

川崎市教育委員会賞
石積みの棚田に父祖の汗偲ぶ　臼井 なおえ

麻生区長賞
風鈴売り風の重さも担ぎけり　池内 英夫

麻生市民館長賞
どの風も噴水に来て踊りけり　堀内 よし彦

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞
隠しごと無くて障子の白さかな　村田 雅松

川崎市観光協会会長賞
看取る夜の浅き眠りや明易し　金井 勝夫

麻生観光協会会長賞
家猫になりたきノラと夕端居　山室 みゆき

麻生区文化協会会長賞
折り鶴に絆と書くや原爆忌　笠原 秋水

～優秀賞～

新涼や風を拾へる竹とんぼ　松野 茂

甚平や薪で飯炊く山暮　関森 田鶴子

表札の亡兄が迎える盆帰省　佐藤 善雄

太陽を背負ふて重し草むしり　馬場 身江子

母の手に踊る新米塩むすび　佐伯 弘子

牧之原富士も詰めたる新茶かな　村松 栄治

上州の風が研ぎ出す軒つらら　堀内 よし彦

羅着てさわさわ浮力の中にあり　松井 和恵

ぼろ市に断捨離ドレス売られけり　橋本 周

片思ひの着てゐる里の盆踊　本玉 秀夫

水底に魚の影澄み涼新た　都留 嘉男

丸善の洋書の匂ひ梅雨に入る　小暮 航

花辛夷本家と呼ばれ独り住む　本玉 秀夫

だっこせし子に抱っこされ更衣　関根 桃鳳

酷暑かな幽霊坂を上りきり　吉田 功

遠花火音は光を追ひかけて　樋口 三千代

星祭百一才の願い事　山下 やよひ

僧と聴く陶風鈴や座禅堂　岩田 輝夫

昼顔のみな海を向く津波跡　川又 要子

故里は婆が手の内きのこ狩　鷲沢 一夫

逆走の子にも声援運動会　金坂 春美

「小学生の部」（五年生）

～優秀賞～

蝉の声短い命もやしてる　栗木台小学校　岡田 志乃

ぱっとちる花火みたいな夏休み　栗木台小学校　古頭 真帆

海水浴遠くに見えるは水平線　南百合小学校　伊藤 駿介

陸奥湾に立てば心も夏休み　南百合小学校　永澤 秀明

ひまわりは太陽パワー食べている　南百合小学校　萩原 颯

セミの子が朝つゆうけて光ってる　栗木台小学校　古性 孝道

カブトムシほしくて朝晩パトロール　栗木台小学校　大海渡 拓哉

大きな木蝉の鳴き声大合唱　栗木台小学校　木場 寛斗

あっかんべーおれたち蝉は逃げ切るぞ　栗木台小学校　鈴木 茉優

夏休み科博のサメの目がギョロリ　百合丘小学校　渡邊 智

◇◇◇

会員の活躍

絵画を通して川崎の文化に貢献

志村幸男

麻生区文化協会では、杉本会長の時に副会長を仰せつかり、また、総文連にも関わりを持たせていただきました。平成二十七年度には、光栄にも文化振興賞をいただき、有り難く感謝申し上げます。

活動は、アルテリッカ新ゆり美術展での出品、舞台衣装の民藝の女優さんを描くデッサン会でのお手伝い、そして、麻生区美術家協会展、麻生区文化祭、夏休み親子教室と行っています。

親子教室では「夏の思い出を墨絵で描く」と題した教室を夏休み終盤に企画し、小学校三年～六年迄の二十名程を教えています。正座にて墨の磨り方、筆の持ち方、描き方など、題材はセミ、トンボ、イルカ、カブトムシ、鯉などを描かせます。なんとか作品が出来た後、それを全員が手に持ち皆の前で披露します。その後スイカ割りで、夏休みの思い出作りを行っています。そのスイカは、市販されたものは勿体ないと言われるので、私が栽培したものを使っています。

また、細山の重度心身障害者施設「ソレイユ川崎」にはひまわりを描いた「道」と題したF一〇〇号の絵画を飾ってもらっています。この絵は水溜まりがある道の両側にひまわりが咲き、遙かに見える山まで続いている風景で、施設の皆さんが元気でいられるように、そして、多くの方々に見守っていただけるようにメッセージを込めて描きました。施設の正面玄関の左手奥の壁に飾ってあります。この作品を見た利用者が喜んでいる様子を聞き、私も嬉しく思っています。

また川崎港「マリエン」には秋桜の絵を展示して頂いています。そのきっかけは、以前偶然にも私の展覧会で、秋桜の絵が市港湾局の方の目にとまり、是非「マリエン」に展示して欲しいとの依頼をいただき、それ以来十五年程毎年作品を替え展示しています。京浜地区は緑が少ないので、お花の絵を飾っていただけたのだと思います。この施設は、小中学校の社会見学のコースになっていて、川崎と木更津を結ぶアクアライン「海ほたる」が見える絶景の場所となっています。他にも、学校をはじめ公共施設などに飾っていただいています。

私は絵画の団体「白日会」に所属しています。この会に出品した作品で「護岸に咲く」と題した秋桜の作品が、偶然「美術の窓」という絵画雑誌の編集記者の目にとまり、掲載していただきました。それは、東日本大震災の翌年のことでした。記事には「大きな石を積み重ねた様子、その下に水が流れているのだろう。上方に太い幹をもった樹木が並んでいる。そしてコスモスの花が右の上に咲いている。赤、白、ピンク。ふしぎな雰囲気で何か哀愁のようなひっそりとした美しさを感じる。震災で亡くなった人に対するレクイエムの気持ちが、このような不思議な花のイメージを作り出したのだろうか」という記事になり、絵画は人の心に一枚の絵として届くのだなと励みになりました。また、今年は白日会第九十二回展において、幸運にも会友から準会員に推挙され、よき年になりました。これからも皆様の応援をいただき、少しでも多くの人々の心に響く作品が出来るよう精進してまいりたいと存じます。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「サロン・ド・シャンソン」二十五周年によせて

佐藤百合子

「愛の讃歌」「枯葉」…パリのシャンゼリゼ通りにあるCDショップの片隅にピアフやイヴ・モンタンのジャケットがひっそりと並んでいる。ドラマチックな愛の詩、粋なリズム、情感溢れる人生の歌、反骨精神。歌の背景を読み取り歌うのがシャンソンの魅力です。その魅力に取りつかれ歌い続けてきた「サロン・ド・シャンソン」の会が今年十二月で二十五周年を迎えます。

平成三年の秋、麻生市民館の成人学校「シャンソン　季節を歌う」を開講し研究会が誕生。そして今年の春に公開講座を開催するチャンスを頂き、今回も大盛況で新しく若い会員が加わりました。スタート時から熱心にご指導くださっている庄司淳先生、支えてくださる地域の方々に感謝、感謝。来たる十二月七日（水）に「二十五周年記念発表会」を麻生市民館大ホールにて開催予定です。心を込めてシャンソンの歌声をお届けします。

展覧会の予告

「佐藤勝昭展２０１６」
★十一月五日～十三日（七日休廊）
★アートギャラリー８８４
文京区本郷三・四・三　お茶の水ビル
★海外の風景画、油彩・スケッチ展示

「松田洋子 洋画展」
★十一月十七日～二十九日（二十三日休廊）
★ギャラリー華沙里
★０号～三十号の油彩作品　展示

「あさお写遊会写真展」
★一月六日～十一日
★市民ギャラリー
★文化協会メンバー中心に七名の写真展
国内外にスポットをあてた一瞬の情景

文化協会のこれから

一月七日（土）
あさお古風七草粥の会
会場　麻生区役所前広場

三月四日（土）
雑学教室

三月六日（月）～十二日（日）
アルテリッカ新ゆり美術展

編集後記

▼今夏は例年にも増しての猛暑！秋が待ち遠しかったが、現実に涼しくなると夏が恋しくなる。人間は誠に勝手なものである。ここで忘れてはならないもの、風化させてはいけないことがある。地震に次いでの風水害の大災害、全国至る所で発生する状況は恐怖である。幸いにして身近では被害は起こっていないが、日頃より備えるに越したことはない。明日は我が身である。被災地への物心共に支援を忘れることなく続けたいと心に誓っている。

▼からむし五九号を契機にA4判に改訂したところ、皆さんから「大変読みやすくなった」「見開きの記事が見応えある」など嬉しい反応や声が聞かれる。編集に携わる者としてありがたく思うと共に、更なる記事や紙面作りに努力したい。

（橋本 周）

編集委員
岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報
からむし　第六十一号
平成二十八年十一月一日発行
発行人　麻生区文化協会
会長　菅原敬子
編　集　麻生区文化協会 広報部
川崎市麻生区万福寺一－五－二
麻生文化センター内
☎　〇四四－九五一－一三〇〇
印　刷　（株）エリアブレイン